

まつだいらしゅんがく
松平春嶽十三歳の書「勉学に励みます！」

よしなが
1 松平慶永筆写 『朱子家訓』
しゅしかくん

平成十七年受贈

『朱子家訓』は中国で古くから読まれてきた家訓書です。勤勉、節約、礼儀、慎重深さを大切にする内容で、家庭教育や人格形成の手本とされてきました。

本資料は、天保十一年（一八四〇）に福井藩十六代藩主松平慶永（春嶽）が書写したものです。数え年十一歳で藩主となった春嶽が学問に勤しんでいた様子がよくわかります。春嶽の小姓などを務めた藩士香西家の子孫に伝来しました。

春嶽十七歳の書 「軍事訓練に励みます！」

2 松平春嶽筆 法令

平成二十五年受贈

天保十四年六月十一日に藩主として初めてお国入りを果たした春嶽は、当時彼が敬愛していた徳川齊昭なりあきの影響を受け、藩内の海防強化に取り組みました。六月二十一日から家中の鉄砲・弓術の上覧を始め、八月十四日からは槍・剣・柔術・居合などの武芸を上覧し、うるう閏九月十四日から二十日にかけては坂井郡吉崎浦よしきみうらから南条郡河野浦こうのうらの沿岸警備の状況を巡視する熱の入れようでした。

本資料は、同年十一月二日に福井城二の丸馬場で実施された仕寄しより（城郭への接近行動）の訓練にあたり、事前に示された「法令」です。

- ①七つ時（午前四時）に御座所へ集まること、
- ②参加の面々は私意を申し立てず「大将」の命令に従うこと、
- ③静粛かつ厳正にして待機すること、を命じています。

春嶽十九歳の書「究極を目指せ！」

3 松平春嶽筆「精義入神」の書幅

平成十九年受贈

掛軸や箱にはこの書が書かれた年代が書かれていませんでしたが、福井藩の側向頭取そはむきとうどり（藩主の側近として日常生活を支え、小姓頭取こしょう・小姓などを監督する役職）の記録である「少傅日録抄しょうふにちろくしょう」の弘化元年（一八四五）十一月二十九日の記録に「御筆精義入神 出洩伝之丞へ」とあり、兵法師範を務めた藩士・出洩家いずぶちに与えられたものとわかりました。「精義入神」は、中国の古典『易経』に由来する四字熟語で、事物の真理を極めて深く研究し、神妙な境地に至ることを意味します。

春嶽二十九歳の書 「桜がきれいだな〜」

4 松平春嶽筆「題王昭君桜」の書幅

平成二十七年受贈

安政二年（一八五五）春に詠まれた詩
で「薄命雖遭延壽筆 天成玉貌不摧塵 春来
渝被東君寵 紅頬雪肌舊態新」とあります。

王昭君は古代中国・前漢の元帝時代以後
宮に入った絶世の美女ですが、宮廷画師・
毛延寿もうえんじゅに賄賂わいろを贈らなかつたため、似顔絵
で醜く描かれ、匈奴きょうとの单于ぜんうに嫁ぐ羽目に陥
りました。この詩は、その延寿の筆によ
る不当な扱いを「薄命雖遭延壽筆」と嘆
きつつ、彼女の美貌が不滅であることを
讃えています。お花見の時期に王昭君桜
を愛でながら詠まれたものなのでしょう。

春嶽四十九歳の書 「悟りに至れ！」

5 松平春嶽筆 「雲披霧卷」の書幅

平成十九年受贈

明治八年（一八七五）に書かれた偈で「雲披霧卷 太虚湛然 塵拂鏡空 清光自全」とあります。「雲や霧が払われ、太虚（天空）は澄みわたり、塵が払われた鏡のように心が磨かれ、清らかな光明が自ずから完全に現れる」という仏教的な悟りの境地を表わす語句と思われまます。

宛名の人物である山岡愨かくは元福井藩士で、明治元年から藩校・明道館めいどうかん寮長となり、明新館めいしんかんに改称された後の明治三年七月まで務めたあと、同年九月には物産修行のため東京へ出立。明治六年からは司法省に出仕し、横浜区裁判所長や安濃津地方裁判所長を務めたことが記録からわかります。山岡家の子孫から寄贈いただきました。

春嶽五十八歳の書「天下泰平で素晴らしい」

6 松平春嶽筆「人間艸木沾皇澤」

の書幅

平成十五年受贈

明治十七年（一八八四）、最後の福井藩主で松平家当主の松平茂昭もちあき（春嶽養子）

に伯爵の爵位が授けられました。本資料はこの受爵の感懐を詠んだもので「人間艸木沾皇澤 天上咸韶送壽觴」とあります。

天皇の優れた統治によって世の中が平和に満たされ、すべての生命がその恩恵を享受している喜びが表されています。

春嶽五十八歳の書「栄枯盛衰など気にしない」

7 松平春嶽筆「栄華難久居」の書幅

令和七年受贈

明治十七年（一八八四）に詠まれたもので「栄華難久居 盛衰不可量 我常信此語 陶詩在一寐」とあります。前半は中国・東晋の詩人である陶淵明とうえんめいの『雜詩十二首』の一節から取られた詩句で、栄華の儂さと人生の無常が説かれています。「世の中の栄枯盛衰を気にするなど無駄なことだ。それよりも、陶淵明が示したような自然な生き方に倣い、ゆったりと構えて過ごすことこそが賢明である」という諦観の境地が表されています。

「詩と酒を楽しもう」

8 松平春嶽筆「名流誰不上名楼」

の書幅

平成二十八年受贈

書かれた年代はわかりませんが「名流誰不上名楼 陣粉圍香付冶遊 羨汝今宵文酒興 満川風露棹扁舟」とあります。名声ある者も誰もが高楼に上って楽しむ、という入りから、酒と風流、そして舟遊びの情景へと流れていく風雅な趣の漢詩で、世俗の名利よりも、目の前の酒興と詩情のほうが尊いという感覚が詠まれているものと思われます。

「みんな頑張れ 體育会！」

9 松平春嶽筆

體育會設立に寄せる書簡

平成十九年受贈

明治十六年（一八八三）三月六日、前年に
福井で有志士族が発足した「たいいくかい體育会」に対し、
金七十円を寄付する内容が書かれています。
旧藩主松平家は東京に住んでいましたが、旧
領福井や旧藩士の動向には気を配っており、
このような寄付も度々行っていました。

料亭を飾った春嶽の書

10 松平春嶽筆「花柳春全盛」の書額

令和八年受贈

明治十四年（一八八一）に書かれた扁額です。寄贈者の実家が営んでいた料亭酔月の旧蔵品でした。花が咲き、柳は葉が茂り、春の盛りのさまを明示する内容が、料亭という華やかな空間にふさわしいものとして求められたと思われます。

「鯉を買って手紙を寄せて下さい」

11 橋本左内筆

「奉送岡田（準介）君帰郷」の書幅

平成二十三年受贈

嘉永元年（一八四八）、十五歳で福井藩の儒学者・吉田東篁とうこうに入門した橋本左内は、かえい嘉永二年には蘭学修行のため大阪へ赴き、おがたこうあん てきじゆく緒方洪庵の適塾おがたこうあんに入門しました。

この詩は大阪遊学中の左内が、吉田東篁の弟で、同門の兄弟子にあたる岡田準介が福井に帰郷するにあたって詠まれたものです。「五月山林听子規 子規一叫使人悲 洛城昨日共論道 湖岸今朝共惜離 離心咽涙難分手 豪気含嗔強引卮 別後君公不捐我 鯉魚買以寄箴詞」とあり、離別の悲しさと、これからも共に真理を求めようという深い精神的な絆が感じられます。

ささやかな供物を携えてお墓参りに来たよ

12 重野成斎筆「景岳橋本君墓ニ上ル」

の書幅

平成二十三年受贈

重野成斎しげのせいさい（安繹やすつぐ）は薩摩藩出身の漢学者で歴史家。徹底した史料蒐集による実証的史学を創始し、日本近代史学の基礎を築いた人物です。薩摩藩士時代には、江戸で儒臣として島津齊彬なりあきらに仕えており、橋本左内とも交流がありました。また明治十八年に南千住みなみせんじゅえこういん回向院の左内墓所に「橋本景岳けいかく之碑」が建立されますが、成斎はその撰文を任されました。明治三十八年（1905）に福井の左内墓所で詠まれたこの詩は「果識蓋披論始公 婦孺状鬼想 英風 隻鷄斗酒郷園裡 来吊孤墳三尺崇」とあります。安政の大獄から約五十年が経過し、ひっそりと佇む左内の墓の前に立った成斎の感動が詠まれています。

「困窮榮達なんて下らんことは言わんでよい」

13 吉田東篁筆「何須傲世說窮通」の書幅

令和五年受贈

明治四年（一八七一）正月に福井の儒学者・

吉田東篁（とうこう）が詠んだ詩で「何須傲世說窮通 屈信

却看造化功 臘雪融辺麗於舊 野梅水柳競春工」

とあります。吉田東篁の漢詩を集めた『東篁

遺稿』に収載されていますが、そこには「辛

未早春次韻答釣月本多君被寄」とあり、福井

藩家老を務めた本多修理（ほんだしゅり）（釣月（ちようげつ））の詩に対し、

同じ韻を押し返したもののようです。残念

ながら釣月の詩は残っていませんが、東篁は

「窮通を説くを須ひず」（困窮榮達なんて下ら

んことは言わんでよい）と書いており、明治

維新によって世の中が大きく変動する中で、

釣月がぼやいた詩に対して返したものかもし

れません。

松平忠昌ただまさが信州松代藩主時代に出した書状まつしろ

14 元和四年霜月日 秋田「」宛

松平忠昌領知宛行状

令和五年受贈

元和四年（一六一八）に出された松平忠昌りょうちあてがいじょうの領地宛行状です。福井藩二代藩主松平忠直ただなおが不行跡をとがめられて改易になり、その弟の忠昌が福井藩主となるのは寛永元年（一六二四）であり、元和四年の忠昌は、信州松代藩主（現在の長野市あたり）でした。宛名については下部が欠損しており、「秋田」しか読めませんが、これは元和三年に忠昌によって召し出された秋田八兵衛のことと考えられます。秋田家は忠昌に付き従って福井藩士となり存続しました。この領地宛行状は、明治時代になったのち、寄贈者の先祖が秋田家の庭師をしていた際に、廃棄されそうになったものをもらい受けたものと伝えられます。

はつてきかみのごとし
「発摘如神」の名警察官は、免許皆伝の腕前

15 直心影流免許状

団野源之進知勝より山田清蔵宛

平成二十五年受贈

直心影流ちよくしんえいりゅうは鹿島神宮かしまじんぐうから始まったとされる

日本の剣術の流派で、江戸時代にいち早く竹刀と防具を使用した打ち込み稽古を導入し、江戸後期には全国に最も広まりました。幕末に勝海舟かつかいしゅうが同流めんきょかいでんを免許皆伝したことで有名です。

本資料は、嘉永三年（一八五〇）に、団野源之だんの進から丸岡藩士の山田清蔵に宛てた免許状です。

山田清蔵はのちに勢三と名を改め、明治五年四十四歳の時より捕亡吏ほぼうり（現在の警察官）として福井警察署に勤務し、一三三七人の犯罪人を逮捕、その功績を称え、明治二十二年には「発摘如神」の石碑が足羽山に建立されました。現在でも三軒茶屋の前に現存しています。

ヤフオクで見つかったお殿さまの道具一覧

16 御国廻り御道具并新御道具帳

平成二十七年受贈

表紙に享保二十年（一七三五）とあることから、十代福井藩主・松平宗矩むねのりの道具類をまとめた記録とみられます。計三九九件の道具には、香道具や文房具、茶道具、印籠など身の回りの道具や座敷飾りに用いられた道具類、書画の掛軸や巻物、古典籍などがあります（詳細は当館紀要23号で紹介）。当時、道具類がどのように管理されていたのか、またどのような道具を所有していたのかを知ることのできる貴重な資料です。

しかしこの資料が発見されたのはネットオークションでした。資料の散逸を惜しんだ当館某学芸員が購入し、当館に寄贈しました。

近年はこのような歴史資料のネットオークションでの取引が増えており、注意が必要です。

コンパクトな越前国の村ごとの石高総覧

17 越前国村々高附帳

平成二十八年受贈

越前国内の各村の石高について、非常に細かい字で書き連ねてあります。福井藩だけではなく、他の諸藩についても書かれており、越前国全体をまとめた内容となっています。

実は井伊大老就任の日に書かれた書付

18 中根雪江筆書付

平成三十一年受贈

当年の帰国について福井藩が幕府へ問い合
わせたところ、老中・内藤紀伊守（信親）か
ら帰国が許されない旨の通達があり、そのこ
とを側用人・中根雪江（せっこう）が江戸藩邸の大奥女中
たちに知らせる内容です。書付の日付と内容
を、藩主の記録である『家譜』（かふ）から検討すると、
安政五年（一八五八）四月二十三日のことと
考えられ、この時期は日米修好通商条約を巡っ
て国中が騒然（なのおすけ）としていた時期であり、また同
日に井伊直弼（なおすけ）が大老に就任していることから、
將軍継嗣問題において一橋派（ひとつばしは）の敗北が決定的
になった日でもありました。小さな紙片で、
特別な内容は無いように見えますが、関係資
料を調べると興味深い歴史が見えてきます。

あすわけん 足羽県時代の文字と印章がある任命状

19 粕谷沙庭宛福井神明社祠官任命状

令和三年受贈

明治五年（一八七二）十一月七日付けで、
粕谷沙庭かすやを福井神明社の祠官しかんする任命状で
す。明治四年五月十四日太政官布告で全国
の神社を官社と諸社とに分けましたが、そ
の諸社に府社、藩社、県社、および郷社の
社格を付して区分したその各社の長官を祠
官といい、宮司と同義と考えられます。

明治四年七月の廃藩置県により福井藩が
廃され、同年十二月には足羽県つるがけんとなりまし
たが、同六年一月には敦賀県つるがけんとなったため、
足羽県時代は一年少々しかありません。本
資料は足羽県の文字と印章の残る貴重な資
料と言えます。

春嶽が眺めたイギリスの城館の風景

20 松平春嶽蔵書

“Jones' views of the seats, mansions, castles”

平成二十一年受贈

一八二九年発刊の、イギリスにおける貴族の邸宅、城館などを紹介した本で、邸宅の歴史的記述とともに美しい風景のスケッチが掲載されています。ジョーンズ社の『グレートブリテン』シリーズの一つとして日本に輸入されたものなのでしょう。松平春嶽の蔵書だったようで、冒頭のページに春嶽の署名と「礫川文庫」の印が見られます。

西洋の文化を知りたいから全文書き写す！

21 鈴木準道のりみち筆写『西洋風俗記』

平成二十八年受贈

明治二十年（一八八七）に刊行された
西澁生にしこせい著の『西洋風俗記』を鈴木準道が
筆写したものです。鈴木準道は旧福井藩
士で藩政時代は郡奉行を務めました。明
治維新後は足羽県権典事、大垣裁判所支
庁長などを歴任した後、明治二十二年の
市制施行時には初代福井市長に就任しま
した。同二十八年で市長を退任し、以後
は越前松平侯爵家の家扶に従事しました。
準道がどのような経緯でこの本を筆写し
たのかはわかりませんが、コピー機など無
い時代ですので、気になる本はこのように
全文筆写したのでしょう。

福井城下の^{だいこくや}大黒屋片山家に^{らいさんよう}頼山陽の書！

22 頼山陽筆「黙齋」の書額

平成二十六年受贈

頼山陽は江戸後期の儒学者、歴史家、漢詩人で、『日本外史』^{にほんがいし}を書いたことで有名です。「辛卯嘉平月、片山雅契（雅兄の意）に嘱す（為に記す）」ことが額面に書かれています。徳富蘇峰^{とくとみそほう}他編『頼山陽書簡集』の解説に、片山家が「山陽五十二歳の天保二年（正しくは元年）十二月片山雅契の為に書した「黙齋」の額面を傳^{つた}ふ」とあり、この額のこととみられます。頼山陽が、片山家五代平三郎^{へいざむろろう}（号白橋、九十九橋外史）に贈ったものなのでしょう。彼は四手井家^{しでのい}より養子に入った人で、九畹^{きゅうえん}の義兄弟にあたります。

女性とは思えないほど強く勢いのある字！

23 片山九畹筆 きゅうえん

「上師聖人下友群賢」の書幅

平成二十七年受贈

片山九畹は安永八年（一七七九）生まれの漢詩人。福井城下の商家・大黒屋片山家の娘で名は蘭。福井藩儒の高野真斎しんさいに師事して儒学を修めた後、京都で書を角田無幻に学び、頼山陽や十時梅厓とときばいがいらと交わりました。儒学者で漢詩人の梅辻春樵うめつじしゅんしょうの妻となりましたが、離婚して江戸へ行き、菊池五山に詩文の添削を受け、詩壇に入ります。晩年は福井に帰って、父が建立した赤坂町の興楽寺こうらくじにて過ごし、五十八歳で生涯を閉じました。

『越前人物志』には、九畹の書は、その筆勢が勁健けいけん（強く勢いがある）で女性の筆ではないようであったと書かれています。

明治期福井の政財界をけん引した 大黒屋の八代目

24 片山平三郎肖像写真

所用矢立・印章

平成二十八年受贈

大黒屋八代目当主・片山平三郎（号
桃洲^{とうしゅう}）の肖像写真と愛用の矢立^{やたて}・印章です。

八代平三郎は、明治十三年に石川県会議員に選出されたのを皮切り、その年に福井商法会議所が設立されると議員になり、のちに会頭を務めました。また明治二十二年に福井市制が施行された際は市議会議員となり、議長も務めています。

照手^{てるて}の三秀園^{さんしゅうえん}を買い取って別荘としてしていたほか、書画にも優れており、日本画家として「大日本書画名家大鑑」にも片山桃洲の名が見られます。

明治時代にアメリカの大学を修了しました！

25 片山禮三宛 れいぞう 南カリフォルニア

ビジネスカレッジ修了証書

平成三十年受贈

片山禮三（明治八年～昭和十八年）は八代平三郎の子で大黒屋九代目当主。父が当主であった明治三十五年頃にアメリカに留学し、一九〇六年には大学等を修了しました。本資料は南カリフォルニアビジネスカレッジの修了証書です。大学修了後もアメリカに滞在し、世界の情勢を見極めていましたが、父の平三郎が亡くなった大正元年（一九一二年）には帰国して跡を継いだようです。しかし大黒屋の主要商い品であった和蝋燭わろうそくや鬢付け油びんづは時代に即さなくなっており、大正二年には大黒屋の屋号とともに家業を他家に譲渡し、東京の居を移しました。

卒業証書も百年経てば歴史資料に！

26 川口小学・明新中学卒業証書

明治四十一年三月二十一日付福井新聞

平成二十四年受贈

卒業証書は旧福井藩士の子である藤井円六のもので、佐佳枝上町さかえの川口小学と明新中学を卒業したときのものです。面白いのは、小学校第一級を卒業した明治七年には県名が敦賀県でしたが、中学予備門全科を卒業した明治十三年には石川県に変わっていたこと。なお、この後、明治十四には福井県になります。

福井新聞は明治四十一年三月二十一日のもので、同じく藤井円六が残っていたもの。赤丸の部分には九十二銀行破綻に関する記事（重役を務めた旧福井藩家老の本多範すすむ自殺事件など）が書かれています。旧福井藩士家出身の円六には気になることがあったのでしょう。

人生を物語る卒業証書と徴兵通知

27 小畑小学校卒業証書

徴兵関係書類

平成十八年受贈

今立郡下池田村（現在の池田町）に住んでいた板倉重吉に関する資料です。小学校だけで六枚の卒業証書がありますが、それぞれ用紙の種類も書式も異なっているのが興味深いです。また明治十三年の第七・八級卒業の時は県名が石川県でしたが、明治十四年以降は福井県になっています。にも関わらず、小畑小学校の印は明治十六年の頃まで石川県のままになっており、県名の移行には数年かかったことがわかります。左下の三枚は徴兵に関する書類で、徴兵にあつたての届出や検査に関する通知、予備徴員になつた旨の通達です。

年に一度の女性だけの集まり 最勝講さいしょうこう

28 最勝講関係資料

(広如筆六字名号・広如消息・最勝講覚)

令和七年受贈

最勝講は、浄土真宗本願寺派の第二
世宗主・広如こうにょにより創始あまこされた尼講あまこです。
天保三年九月、諸国の最勝講宛に広如の
消息しょうそくが発布はつぷされており、展示している二
巻の巻物がそれにあたると思われます。

消息は「抑そもそも、この最勝講ハ何のためそ
といふに、一切の女人みだ弥陀の本願を信し
て、往生おうじよう極楽の素懐をとくへき為なり」
という文言から始まり、五障ごしょう三従さんじゆんという
女性の罪障を強調することで、女性の救
済きうさい(女人往生)を説く内容となっています。
現代から見れば女性差別的と評価される
かもしれませんが。

最勝講は講員の女性がお宿に集まり、一緒に料理を食べ、正信偈のお勤め、消息の拝聴、お説教などがあり、一日かけて行われたということです。

本資料は福井市下六条町の「お西の東」「お西の西」の最勝講から、その解散にあたって寄贈されたもので、毎年の運営記録である「覚」には、講員名簿や収支内容などが記録されています。

明治天皇から下賜かしされた菊紋の碗

29 橋本綱常つなつね拝領 菊紋唐草文染付碗

平成三十年受贈

橋本左内の弟で、陸軍軍医総監・日本赤十字社病院長・東宮とうぐう拝診御用いしんごようなどを歴任した医師・橋本綱常が、明治天皇お招きの晩餐会ばんさんかいでお土産として下賜されたと思われる碗です。菊の御紋が表されており、宮中で使われたものにふさわしい姿になっています。

綱常の長女が嫁いだ奥野家に伝来しました。

さあご覧あれ！福井の歌舞伎は照手座てるてざで！

30 福井照手座の引き札

平成二十五年受贈

照手座は、明治十四年（一八八一）、今の福井市照手・三秀園近くに開館した芝居小屋で（明治十七年には馬場（現在の順化一丁目）に移転）、明治二十四年に福井出身の奇術師・松旭齋しょうきやくさいてんいち天一が初の里帰り興行を行った会場としても知られています。

本資料は年代不明ながら歌舞伎の興行が行われた際の引き札（宣伝用チラシ）で、照手座のにぎわいを思い起こさせる貴重な資料です。

その後照手座は芝居小屋から寄席よせ「照手席」に変わっていき、大正五年に閉館しました。

くずりゅうがわ 九頭竜川の水害を克服した喜び！

31 はるえていぼうはちがすいこう春江堤防八ヶ水閘に関する資料

令和六年受贈

県内最大の河川である九頭竜川は古来暴れ川として度々洪水をもたらししてきました。明治時代になっても、その右岸下流の高屋（現福井市）から定広（現坂井市）までは無堤状態であったため、洪水のたびに水害を被っていました。これに対し、水害地域の有力者たちは、国・県への請願や工事・用地買収の費用を負担することで築堤工事を推進させ、明治三十二年に春江堤防が完成しました。

本資料は築堤に尽力した二日市ふつかいちの五十嵐いがらし千代三郎ちよさぶろうの子孫から寄贈されたもので、九頭竜川とその支流・八ヶ悪水川との水位調整のために設けられた水閘の完成を記念した盃さかづきと写真、童謡の歌詞カードです。

あすわやまこうえん
足羽山公園への多額の寄付に感謝します

とみおかちゅうじろう
32 富岡仲次郎宛 山品捨録感謝状
やましなすてろく

令和二年受贈

明治四十二年、皇太子（のちの大正天皇）
行啓記念事業として足羽山公園の造成が
行われました。明治四十二年七月七日に
起工し、約二か月の突貫工事で進められ、
延べ一万五千人の市民・周辺村民が奉仕作
業を行いました。また工費は巨額を要し、
資金集めは困難を極めました。市内の
羽二重商はぶたえしやうであった富岡仲次郎らが多額の
寄付を行い、無事に同年九月十六日に完
成しました（なお行啓は九月二十二日）。

本資料は、皇太子登臨に際し設けられ
た特設の展望所（継体けいたいてんのう天皇石像の横に設
けられた）の寄付に対し、山品福井市長
から富岡宛に送られた感謝状です。

明治時代、驚くべき鉄道網の整備の速さ！

33 『改正鉄道地図』（明治四十五年）

平成十六年受贈

全国に鉄道網が急速に広がっていった明治時代、その最後の年である明治四十五年に発行された鉄道地図です。日本列島だけではなく、南樺太からふとや朝鮮半島、遼東半島、台湾の鉄道に鉄道網も記されており、その広がりには驚かされます。

官有鉄道だけでなく、私鉄についても示されています。

九十九橋架換記念 つくもばし みんなで渡り初め！

34 昭和八年九十九橋架換工事関係写真

令和七年受贈

昭和八年十月、天皇臨幸の下、福井県内で陸軍特別大演習が行われましたが、それに先立って、福井市内の幹線道路の舗装や橋梁の架け換えが進みました。旧北国街道に架かる九十九橋もその一つで、本資料はその架換工事の詳細を撮影した貴重な資料です。工事だけではなく、架橋後の渡り初め式の様子なども写されています。

毛利もうりからやってきた若殿さまの雀の絵？

35 伝松平昌方まさかた筆 竹すずめに雀すずめ図

平成二十九年受贈

本作品の作者と伝えられる松平昌方は、長州藩二代藩主・毛利綱広もうりつなひろの五男として誕生し、元の名は毛利長吉。元禄三年（一六九〇）、跡継ぎのいなかった福井藩七代藩主・松平昌親まさちか（吉品よしのり）の養子となり、松平昌方を名乗りました。これは父・綱広ゆうきひでやすが結城秀康の外孫（つまり長吉は秀康の曾孫ひまご）であったことなどによるものと思われます。しかし元禄十二年、多病を理由に養子縁組は解消され、実家の毛利家に戻りました。昌方が絵に堪能だったかどうかの記録はないですが、この絵にはぶっくりとした雀が上手に描かれています。

森田に絵がすごく上手なお坊さんがいた！

36 いしがみはくうん 石上博雲筆 滝つばめに燕図

令和六年受贈

石上博雲は、天保十二年福井藩士の家に生まれ、のちに剃髪ていはつして下森田の光臨寺住職となった画人です。幼少の頃より絵画をよく描き、島田雪谷せつくくについて画技を修めました。技能が熟達すると文人画ぶんじんがも学ぶようになり、神技を極めたと評されます。特に達磨だるま図が巧みであったそうです。のちには帝国絵画協会の会員になり、美術評論家の別格推薦を受けしました。また鈴木松年、小室翠雲、山田介堂らと交友がありました。本作品には少ない筆線で表された滝に、燕が颯爽と飛ぶ様子が描かれています。

結婚祝いにもらった美しい屏風

37 やまだかいどう 山田介堂筆 四季山水図貼付屏風

平成三十一年受贈

山田介堂は、丸岡藩家老職を務める家に生まれました。幼少期から絵を好み、京に出て富岡鉄斎に師事、後に明石の細谷立斎、豊後日田の平野五岳にも学びました。三十六歳で京都に一家を構え、日本美術協会、京都美術協会などの会員となり、田近竹邨、池田桂仙と共に大正期の南画壇の三元老として活躍しました。

本作品は、寄贈者が昭和二十五年頃に結婚する際、祝いの品として父親から贈られたものだそうです。四季の花々と山水図が交互に描かれており、見る者の心を穏やかにしてくれるような美しい作品です。

ふっくらとした頬とにっこり笑顔が可愛い

38 狂言面 乙

平成二十五年受贈

旧福井藩士生田家いくたから寄贈されたもので、お多福とも呼ばれる面です。詳しい伝来はわかっていません。ふっくらとした頬と穏やかな笑みを浮かべた、若々しく快活な女性（未婚の娘や姫）を表す面で、狂言などに用いられました。

「天下第一」の鏡！

39 柄鏡 えかがみ

「薰」松竹梅図

「高砂」松竹双鶴図

「千鳥」月下波頭図

令和二年受贈

それぞれ「まつむらいなばのかみ忝村因幡守藤原重義」「天下

一人見和泉守藤原重次」「天下第一山城住藤

原正重」という鏡師の銘を持つ大きな柄鏡です。鏡背に吉祥文様と文字が巧みに表現されています。いずれも十八世紀後半頃の作と考えられる江戸時代の金工作品の名品です。

小さいけれど細部まで表現する神技！

40 島雪齋作 しませつさい 三尊仏 さんぞんぶつ

平成二十七年受贈

島雪齋は、三国木彫志摩派の祖、志摩乗時しまのりときの高弟で、師からは「我れ門人多しといえども彼に及ぶものなし」と言われるほどの腕前でした。その作品は写実に優れ、彫刻の本質としての立体的な物の捉え方が秀逸だったといわれています。

雪齋は、その高い技術力から御用職人に取り立てられ、松平春嶽が上洛した際には、雪齋作の紫檀したんの書棚が朝廷に献上され、法橋ほつぎょうの位を賜ったことでも知られています。

本作品は、小さな木材に如来像にょらい、白衣観音像びやくえかんのん、地藏菩薩像じぞうぼさつの三尊像を彫り出す一木造りで、細部までよく表現されています。島雪齋の彫技を十分に堪能できる作品と言えるでしょう。

「藤島」ゆかりの室町期の刀

41 脇指 無銘 藤島友重

刃長五〇・〇cm 反り一・〇cm

室町時代 平成二十五年受贈

無銘ですが、南北朝時代の越前に興った刀工・藤島友重の作と鑑せられています。友重は名前のおり藤島莊ふじしまのしょう（現在の福井市林藤島町を中心とする九頭竜川左岸地域）を本拠としたとされる刀工で、友重をはじめとする藤島派は室町時代には加賀国に移住して江戸時代まで続きました。本刀は大磨上おおすりあげで無銘となった平造ひらづくりの脇指で、角ばった互ぐの目（箱刃）が連なる刃文を焼き、刃中に足あし・葉よう・砂流すながといった景色もよく見られます。

福井藩お抱え鍛冶の刀、実戦で使われた？

42刀 無銘 重高

刃長七三・七cm 反り〇・九八cm

江戸時代前期 平成二十五年受贈

無銘ですが越前の刀工・重高の作と鑑せられていきます。初代の重高は福井城下の刀工で、康継を代表とする下坂派に属し、慶長一六年（一六一一）を最古の年紀として江戸時代初期に活躍しました。後代が正徳三年（一七一三）にお抱え刀工となり、下坂（康継）家・島田（国清）家に次ぐ序列の「鍛冶播磨^{かじはりま}」として幕末まで続きました。本刀は、鋸元^{はばきもと}から約一五cmの棟側に、実際に刀を交えた際に生じたとみられる「切込み疵^{きりず}」が見られ、その由来が気になる場所です。

刀生産の中心地、関がルーツの刀鍛冶

43 脇指 銘 筑後守藤原包則

刃長 五八・二cm 反り 一・一cm

江戸時代前期 平成二十五年受贈

初代包則かねのりは寛文年間（一六六一～一六七二）を中心に福井で活躍したとされる下坂派の刀工。先代が美濃国関せきから越前へ移住してきた「越前関えちぜんせき」の一派に属していたと伝わります。

反りやや浅く中切先。鍛えは越前の刀によく見られる板目いため交じりもくまで肌立ち、地沸じにえがよくついています。刃文はのたれに小互の目交じり、処々に小足入り金筋・砂流しなどの景色が見えます。表に「素剣すけん」、裏に「護摩箸ごまほし」の刀身彫刻が入っています。

一乗谷で活躍した刀鍛冶の流れをくむ

44刀 銘 越前国住兼法

刃長 七三・四cm 反り一・〇cm

江戸時代初期 平成二十七年受贈

越前国住を名乗る兼法は美濃国関の刀工であった先代兼法の子で越前一乗谷に移住したといひます。江戸時代には肥後大掾ひごだいじょうを受領していましたが、越前で肥後大掾を受領した刀工は彼のほかに初代康継などがあり、時期もほぼ同じであることから、下坂派の代表的存在であった康継との密接な関係がうかがえます。

本刀は寄贈時から錆が見られ、状態が良好とはいえませんが、互の目・丁子乱れに飛焼とびやきを交えた、皆焼風ひたつらの華やかな刃文が見てとれます。

福井藩重臣の旧蔵品と伝える刀と拵

45 脇指 銘（葵紋）以南蛮鉄越前康継

刃長 三三・六cm 反り〇・五cm

江戸時代前期 平成二十八年受贈

福井の代表的刀工の一人、康継作の脇指。

康継は同名を代々襲名しており、この脇指は銘ぶりから越前三代目康継ころの作とみられます。福井藩重臣・酒井外記家旧蔵という伝があります。付属する拵も上質で、鞘が「ふえまきぬり笛巻塗」と呼ばれる変わり塗、金具はこじり鐙にふちトンボ、縁にクモ、かしら頭にカマキリと、むしづく虫尽しで揃えており、趣味性が高いといえます。

身幅極めて広く、反りついて豪壮な姿。

よくつんだ板目肌のたに地沸こまかくつき、刃文は匂口が締まり刃縁明るく冴えた湾れを基調としています。

福井藩士が大切にした刀

46 変わり塗鞘打刀拵

変わり塗鞘脇指

江戸時代 令和四年受贈

旧福井藩士家伝来品。対となる大小拵ではありませんが、金具の質などから、いずれも中級クラスの藩士が実際に身につけていたものとして考えられます。中身の刀は、打刀の方が無銘ながら室町中期ころの備前刀と考えられ、脇指は初代康継銘です。脇指の銘は通常みられる銘ぶりとは異なる点があり、研究の余地があります。いずれにしても康継作の刀が福井藩士の間でも尊重されていたことがわかります。

藩主からの拝領品と伝わる古刀

47短刀 無銘

刃長二七・一cm 内反り

室町時代 平成二十六年受贈

旧福井藩土家伝来品で、幕末の藩主・松平春嶽筆の書幅とともに、藩主家からの拝領と伝わる品として寄贈を受けました。

無銘ですが、その姿から制作時期は室町時代を下らないようです。茎の形状が刃側に出張った「タナゴ腹」で、表裏の刃文が揃う等の特徴から、村正むらまさを代表とする伊勢国千子派せんごはの作と思われま

す。付属する拵は、鞘は蝟色塗ろいろぬりに牡丹獅子の蒔絵を施し、金具も上質なもので揃えられ、拝領品との伝もうなづけ

豪雨の被害からよみがえった刀

48 刀 銘 雲州藩藤原長信作

安政五年二月日 有馬純正公

吉村重久拝領之

刃長六四・八cm 反り一・八cm

安政五年（一八五八） 平成十八年受贈

平成十六年の福井豪雨で住居が床上浸水の被害を受け、刀身全体に赤錆あかさびが発生したものの、その後研磨により元の輝きを取り戻し、当館に寄贈された刀。太平洋戦争時、寄贈者が海軍将校として出征する際に、軍刀として持参させるため親が市内の刀剣商から求めたものとされます。片側に鎬しののない片切刃造かたきりはづくりの刀で、小板目よくつみ精美な地鉄に地沸こまかにつき、地景があらわれます。表にカンマン（不動明王）、裏にウン（降三世明王）の梵字を彫刻しています。

長信は幕末の松江藩のお抱え刀工で、江戸にも出て作刀しています。また若狭国をルーツとする刀工・冬廣ふゆひろの末裔まつえいを名乗ってもいます。銘にある「有馬純正公」は幕末の記録に千八百石の旗本としてその名が見えます。「吉村重久」については現在のところ詳細不明です。